

目次

【序論】  
0. 序  
0-1. 研究目的  
0-2. 研究方法  
0-3. 既往研究  
0-4. 研究背景  
【本論】  
1. 底本『Cottage Building』  
1-0. はじめに  
1-1. 書誌情報  
1-2. 著者 C. B. アレン  
1-3. 出版社  
1-4. John Weale の専門書シリーズ  
1-5. 再版に伴う内容の変遷  
1-6. 英国出版界の構造  
1-7. 小結・底本の出版意図  
2. 翻訳書『西洋家作雛形』の書誌学的把握  
2-0. はじめに  
2-1. 書誌情報・奥付分析  
2-2. 版元  
2-3. 訳者 村田文夫  
2-4. 本書の流通可能性  
2-5. 小結  
3. 『西洋家作雛形』成立の背景  
3-0. はじめに  
3-1. 序文読解 銀座大火と煉瓦街計画  
3-2. マクヴェインとの出会い 翻訳の経緯  
3-3. 両書の目次比較  
3-4. 小結  
4. 『西洋家作雛形』における建築表現の比較検討  
4-1. 印刷技術歴史  
4-2. 本書における印刷プロセス  
4-3. 掲載図版の分類・傾向  
4-4. 建築表現変換の比較調査  
4-5. 要因の考察  
4-6. 小結  
5. 考察 『西洋家作雛形』の建築表現史的評価  
5-1. 近世から明治における建築メディアの流れ  
5-2. 西洋家作雛形』の建築表現史的評価

結論  
謝辞  
図版出典・参考文献



図1 『西洋家作ひながた』玉山堂蔵書版 中表紙



図2 『増補 西洋家作ひながた』千鐘房蔵書版 表紙

【序論】

0-1. 研究目的

「翻訳」とは、ある特定の形式Aで表現されているものを、異なる形式Bのなかで置き換えることをいう。その意味で、幕末から明治にかけての大翻訳時代には言語だけでなく曖昧な概念、書物という方式、視覚的表現にすら共通するものではなく、いずれにおいてもその間に「翻訳」という行為が生じていた。

明治期建築書『西洋家作雛形』は日本で最初の建築翻訳書として知られ、建築学・日本語文化史の両面から研究が行われている。その翻訳の精度はいずれにおいても高く評価され、既往研究ではその内容理解や翻訳に至る経緯に重きがおかれていた。しかし本書の翻訳事業に際しては言語や建築知識のみならず、建築の図的表現、ひいては建築メディアという概念の「翻訳」が起こっていたと考えられる。

ゆえに本研究では、『西洋家作雛形』を書誌学的に把握し、その唯物的側面から本書の書物としての性格と建築表現を検討することで、翻訳出版にいたるまでの変質のプロセスを明らかにし、本書に建築表現という新たな側面から評価を与えることを目的とする。

0-2. 既往研究

佐藤功一「西洋家作雛形解題」(1930)  
本書について論じた最初の論。本書を「日本に於て最も古く出版せられた建築構造の書物である」とし、その経緯については当時大蔵省に雇われていたウォートルスの紹介、あるいは彼の蔵書のなかから選ばれたのではないかと推測にとどめている。

菊池重郎「明治初期洋風建築技術書『西洋家作ひながた』  
本書の底本を特定、『西洋家作雛形』の版本についての整理など、本書の書誌学的概要を整理した点において重要。以降の研究はほぼ菊池による指摘を前提としてすすめられている。  
丹羽和彦「村田文夫と『西洋家作ひながた』について」  
菊池の論をベースとし、主に村田の経歴について本書の書誌学的補遺を行ったもの。村田文夫について、官職を勤めたのちに自由民権運動の高まりとともに職を辞し、新聞社の設立など言論の世界へ身を投じたことを言及している。

藤田治彦「明治5年刊『西洋家作雛形』の建築用語」(1999)  
本書の翻訳意図について、序文の読解により「防火目的」であることを強調している。また本書の翻訳精度を建築関連用語の抽出によって検討しており、かなり適切な訳があてられていることを評価したうえで翻訳に際して助言した西洋人の存在があったことを推察している。

前田富祺「『西洋家作雛形』の資料性」  
明治初期の翻訳書、特に木版本の場合にはその印刷技術や表記の習慣の問題から扱いが非常に難しいことを述べた上で、本誌の資料性の検討としてその体裁についていくつかの指摘を行っている。本論では3章においてこれらを検討する。

丸茂友里「明治初期翻訳書『西洋家作雛形』の史的役割」  
本書と原著の出版当時の諸背景を明らかにしたうえで、本書の翻訳においては銀座大火を経て「防火建築としての煉瓦建築の紹介」「西洋建築の導入」「貧困者の救済」に重点がおかれたことを指摘している。

1 佐藤功一「西洋家作雛形解題」『明治文化全集 第二十四巻 科学篇』(日本評論社、1930, p.13)

【本論】

1. 原著『Cottage Building』

本章では原著における建築表現の性格を把握するため、著者アレンと編集者ジョン・ウィールを中心として本書に携わった人物の概要をのべ、版を重ねることによるコンテンツの変化を追った。

1-1. 書誌情報

底本は初版の1849年から1906までに13の版を重ねており、出版社や著者に変化が生じているのを表1にまとめた。

1-2. 著者 C. B. アレン

これまで原著の著者アレンについては多くは明らかにされていなかったが、今回、ジョージ・ギルバート・スコットの著作によって、彼は24歳の時にスコット率いる建築家集団による建築博物館(Architectural Museum)の設立に関わっていたことがわかった。アレンはここで芸術労働者としての建築家の育成に意欲をもち、同博物館で芸術学校を開くほどの人物であったことが明らかとなった。

1-4. John Weale シリーズ

『Cottage Building』は単独で出版されたものではなく、ジョン・ウィールの130を超えるラインナップによる“Rudimentary treatise (初歩的専門書)”のひとつであった。本書は非常に安価で良質な専門書であり、ロンドン万博にてメダルを受賞している。また明治期の大蔵省文庫のなかに本シリーズの技術書が複数含まれることから、本シリーズが建築技術書のなかで一定の評価をえていたことを指摘した。

1-5. 再版に伴う内容の変遷

本節では本書再版の際に執筆された各序文や、コンテンツの変遷を把握することで、本書を形成する執筆意図の揺らぎを明らかにした。著者アレンは版を重ねるにつれ「美術と建築」について執筆することが増えるようになり、5版序文では「J. weale氏が、特に農耕地域において労働者の状況が向上するようという願いをもっていた」こと、アレンはウィールが「改善することは新しい発明や仕掛けを家に組み込むことだ」という考えのもとに改善策を求められ、それに答えるべく具体的提案を執筆してきたということが述べられ、編集者の積極的姿勢が見取れる。本書の性格はアレンとウィール両者の意欲のぶつかりどころとして理解するべきであることを指摘した。

1-7. 小結

以上のことから、『Cottage Building』は「芸術的観点から住まいを見る目を持つこと」を望む著者アレンと、「技術による具体的改善策を提案することで労働者環境を向上したい」と願う編集者ウィールとのもとで、安価な書籍形態で広い地域の労働者に対して専門知識の提供を行い、具体的方策の実践を勧めることで、読み手自身がそれぞれの地域において自らの頭で快適さと美的観点の両面から住まいについて考え、判断し、行動することを促す《啓蒙書》であったと捉えることができた。

2 スコットの提唱によって建築芸術労働者(architectural art-workers)の教育を目的としてウェストミンスター・キャンノン・ロフにつくられた博物館。  
3 池上重彦「大蔵省文庫集積部蔵書西洋書について」(日本建築学会 許酒系論文集 第615号、2007.5, pp.207-214)による

2. 翻訳書『西洋家作雛形』の書誌学的把握

本章では翻訳書『西洋家作雛形』の基本的情報についてまとめ、本書が書物としてどのような性格を有していたかを明らかにする。

2-1. 書誌情報・奥付分析

これまでに確認された版本をその奥付から4つのパターンにわけ、その分析をおこなった。

	A	B	C	D
所在	国立国会図書館	早稲田大学	中央図書館	立教大学
表紙	表紙	表紙	表紙	表紙
奥付	西洋家作ひながた	西洋家作ひながた	西洋家作ひながた	西洋家作ひながた
訳者	村田文夫 山崎真一	村田文夫 山崎真一	村田文夫 山崎真一	村田文夫 山崎真一
発行元	玉山堂	玉山堂	玉山堂	玉山堂
その他	表紙の紙、色紙の表紙あり	表紙の紙あり	表紙の紙あり	表紙の紙あり
内装	表紙	表紙	表紙	表紙
発行年	明治5年	明治5年	明治5年	明治5年
奥付	明治5年	明治5年	明治5年	明治5年
書名	西洋家作ひながた	西洋家作ひながた	西洋家作ひながた	西洋家作ひながた
その他	本文の紙質がよい	本文の紙質がよい	本文の紙質がよい	本文の紙質がよい
寸法	270x130	270x130	270x130	270x130
印刷	木版	木版	木版	木版
紙質	和紙	和紙	和紙	和紙
形式	洋装	洋装	洋装	洋装
体裁	洋装	洋装	洋装	洋装
巻数	一巻	一巻	一巻	一巻
頁数	二十八丁	二十八丁	二十八丁	二十八丁
その他	『西洋家作ひながた』の複製本	『西洋家作ひながた』の複製本	『西洋家作ひながた』の複製本	『西洋家作ひながた』の複製本

表2: 『西洋家作雛形』各種版本  
初版玉山堂版の奥付分析から、本書は初版当初複数の書林による共同出版によって成立したことがわかった。以上をふまえ、4種類の版本の順が(A)刊行見本刷り(A)→明治5年 玉山堂を主版とした8書店の共同出版により初版刊行(B)→須原屋が全ての板株を買い上げる(C)→明治37年鈴木荘太郎が千鐘房の堂号を受け継ぐ(D)であることを確かめた。

2-2. 訳者 村田文夫

村田(1836-1891)は1865年に國禁を犯して渡英、トーマス・グラバーの故郷アバディーンに1年半ほど滞在し、語学はもとより算術、測量術、地理書を学んだ。各地を巡ったのちに帰国するとすぐに工部省雇いとなり、明治4年に発足した工部省にて「文書局訳文方」に任命される。その後測量正として出仕するが明治10年には職を辞し、風刺雑誌「蘭園珍聞」を創刊する。この雑誌は明治12年には発行部数15,000にもなると、村田の死後も明治40年までは活動が続いていた。また村田文夫は個人として様々な著作を手がけており、渡英体験をもとに書いた『西洋間見録』は西洋世界の全体像を思い描かせるという点で福沢諭吉の『西洋事情』にも匹敵する書籍だったという人もいるほどであった。

2-3. 版元

『西洋家作雛形』は正味2つの出版社を渡ったことになり、本節ではそれぞれの評価など概要を把握した。本書の初版が中世から建築書を独占的に扱ってきた須原屋でなく玉山堂から出版されたことについては既往4 尾佐竹編『西洋間見録 解題』『明治文化全集 第17巻(外国文庫編)』(日本評論社、1992, pp13-15)

の研究でも触れられているが、前節で把握した村田の業績を見ると、『西洋見録』をきっかけとして村田が玉山堂とのコネクションを持っていたことを指摘した。

#### 2-4. 流通可能性

明治時代における書物の流通を把握する資料は現存せず、これまでも本書の流通が明らかにすることは難しい。本節では『西洋家作雛形』が新聞広告にのせた記事の文言からその読者層として建築のアマチュアを想定していたことを指摘し、さらには本書の価格帯の分析から書物、ひいては建築書としての位置づけについて考察した。

年代	発行	『西洋家作雛形』価格	大工日給	米一升
1872		定価 銀65匁 与金1.08円	銀 12 匁(1868)	3.8 匁
1886	玉山堂	定価 1円	42 匁	5.6 匁
1893	千鐘房	正価 45 匁	50 匁	7.3 匁

表2 絵科および米との価格比較

年	書名	著者	発行	冊数	価格	備考
1870	増字 寄附往來	鈴木清盛 著	鈴木清盛	25丁	23	記載なし
1872	西洋家作のなかへ	ジーン・ブラス・アム	玉山堂	4巻(巻1~4合本)	25.16	六十五匁
1875	新編 寄附往來	本邦書林 著	千鐘房・一段堂	3巻(合本)	23	印刷
1876	新編 寄附往來 復字	西田翠峰 著	成美堂	47丁	12.18	十匁
1876	新編 寄附往來 2冊	本邦書林 著	鈴木清盛	88丁	9.19	四匁
1884	匠家技師伝	片桐運平 著	開運堂	1巻	29	印刷
1884	造家法	デューン・著、野田直吉 訳	丸善	32巻(洋装)	26	印刷
1886	西洋家作のなかへ	村田文夫・山田寅三	玉山堂	4巻(巻1~4合本)	23.16	六十五匁
1886	当世初心帳	大賀龍圖	山田寅三	2冊(上・下46丁)	145.32	五匁
1886	匠工必携	徳田四子吉 著	徳田吉次郎ほか	43丁	13x18	五匁
1886	造家必携	ジャコブ・コンドル	加藤良吉	120巻(洋装)	20	二十五匁
1887	当世寄附雛形	島田金太郎 編	神山俊吉	2冊(上・下31丁)	118.16	十二匁
1887	明治新編 寄附往來 新編	村井静馬 編	村井静馬	2冊(上・下43丁)	118.19	十匁
1888	建築学指南	中村達太郎 編	永倉隆吉	1冊(洋装)	19	四匁
1889	工部技師伝 明治新編	林忠世 著	秋田世徳	1冊(洋装)	23	印刷
1889	匠工必携	下田寅三 編	下田寅三	1冊(洋装)	17x19	三匁
1889	新編 大工職 西洋技師	徳田四子吉 著	徳田吉次郎	21丁	26	五匁
1891	建築学指南	千葉文彦 著	丸善	312巻(洋装)	15	五匁
1893	寄附 西洋家作雛形	村田文夫・山田寅三	千鐘房	4巻(巻1~4合本)	23.16	六十五匁
1894	建築学指南 寄附往來	北川邦方 編	精工舎	96巻(洋装)	22	七匁
1895	匠家技師伝 新編	石井三郎 著	石井三郎	17丁	26	四匁
1896	大匠新編 全冊	角田吉郎 著	林忠世	3冊(巻1~6合本)	22	印刷

表3 近刊価格一覧

以上の表から、1872年出版当初は定価 65 匁 ≒ 1.08 円で、当時の大工の日給の2倍強、本書が4冊組計120丁近い長編であることを鑑みても、少々高い値段設定であったことが読み取れる。また1886年時点では他の翻訳建築書が非常に安く売られていることは着目に値する。しかし千鐘房へ板株が移動し1893年をみると、額面は半分以下に値下がりがしている。大工の日給に照らしても、本書が買い求めやすい値段になったことは明らかである。

#### 2-5. 小結

以上のことから、まずは村田文夫が本書翻訳当時言語的素養のみならず、生活や風俗に対する理解もかなり高度な段階まで達成されていたであろうことが指摘できる。また彼の実績や、約10年の遅れをとって出版されたコンドルの著書『造家必携』が本書を大きく下回る値段で流通していたことから、本書は政府の意図によってではなく村田文夫のジャーナリズム活動の一環の書物として捉えるべきであるといえる。

#### 3. 『西洋家作雛形』成立の背景

本章では、本書成立の背景として既往研究でも検討されてきた銀座大火と銀座煉瓦街との関係について既往研究をもとにまとめ、さらに近年泉田の研究によって明らかになった事項を加えてその背景を再考した。

#### 3-2. 翻訳の経緯 マクヴェインとの出会い

公文書やマクヴェインの日誌から工学校設立までの流れを研究した泉

田氏によれば、工部省で測量師として働いていたマクヴェイン (Colin Alexander McVean, 1838-1912) は当時工学権助として出仕していた村田文夫とともに働くことが多かった。そして1872年2月の銀座大火後、マクヴェインは山尾庸三の指示によって被災地を測量し、復興計画案を提出した。この計画は採用とならなかったものの、泉田はその大部分がウォートルスの計画に引き継がれたとしている。村田は、この復興計画提案の翻訳を担当していた。またマクヴェインが所持していた様々なジャンルの雛形本のなかには『Cottage Building』が含まれていることがわかっており、本書は復興計画案作成の際に補助的に翻訳させたものと考えられる。

#### 3-3. 両書の目次比較 翻訳しなかったこと

ここまでのことを踏まえ、大枠の翻訳編集方針を捉える材料とするため、本節では本書に未訳出となった章の内容を確認した。底本では「Introduction」としてイギリスにおける貧困者の状況、それに対する国や富裕層による慈善活動とその是非についてふれ、労働者住宅へのさらなる注目の必要性について書かれた章が本書では未訳出となっている。丸茂の研究ではこうした編集について「翻訳着手時には貧困者の救済が主眼とされていたが、大火を経て防火建築の普及へと必要性が変化するため」と述べているが、村田自身が復興計画の現場にあったことをふまえると村田の編集姿勢が異国ロンドンの貧困の現状と対策、思想について伝えるという段階から、ロンドンで労働者住居改善のために提案された本書を日本の住居建築に適用可能なものにする段階へと移行したために英国特有の事情は捨棄されたと見るべきであろう。

#### 3-4. 小結

本章では泉田の研究を軸として本書の翻訳経緯における銀座大火との関係を再考した。その結果、村田にはこの経験によって建築における素養までもが培われており、本書翻訳の意図は、彼が元来持っていた「ジャーナリストとして」の意欲と、銀座大火に即して感じた「復興計画の関係者として」の使命感の二つの側面から理解できることを指摘した。後者はあるいは、本書の翻訳によって当時立ち退き問題や居住希望者の少なさといった困難に面していた政府によるトップダウンの煉瓦街政策を、住み手の側から推し進められることを望んでの出版であった可能性も考えられる。

#### 4. 『西洋家作雛形』における建築表現の比較検討

本章では本書における建築表現、特に図版表現に着目し、その整理・編集意図の分析を行った。

#### 4-2. 本書における印刷プロセス

本書に用いられている印刷技術を、技術史的整合性と資料の観察にもとづいて分析した。『Cottage Building』は活版印刷に木口木版による挿絵、『西洋家作雛形』は木整版による一枚ずりの技法が用いられていることを確認した。また図版の転載プロセスについては、両書の図版を無作為に抽出し重ね合わせるテストによって、図版の転載は模写・模刻ではなくトレースによるものであることを明らかにした。

#### 4-4. 建築表現変換の比較調査

本書掲載の図版87枚を原著と比較し両者間に生じている差異を図のような比較シートを作成して調査した。その結果、図版の際は以下の8カテゴリに分類することができた。

- A ハッチングの省略
- B ハッチング・表現の変更
- C 陰影の削除

5 明治5年2月26日、和谷門前から出火した火は北西の風にあおられて銀座、木俣町を焼き尽くし、築地外国人居留地にまでいった  
6 丸茂友里「明治初期翻訳書『西洋家作雛形』の史的役割」(2014)

- D 線の太さ
- E 図中番号の振り直し(翻訳時の順番の入れ替え)
- F 部材・要素の削除
- G 線の種類(点線・実線・一点斜線など)
- H その他(線のはみだし、形状の違いなど)

#### 4-5. 差異要因の考察

本節では調査によって明らかになった差異の要因を考察するため、まず両者の描画技術の特徴を把握し、意図的な編集操作の抽出を試みた。まず描画技術の特徴として、銅版画の系譜をもつ木口木版では細密な直線によって面を削り、陰影を表現するのに対し、日本で発達した板目木版は輪郭を残して掘り込み、はっきりした輪郭と刀や和紙や刷りのテクスチャーを利用した表現が特徴となる。こうした技術的背景をふまえると、A,B,C多くはこの問題によって再現不可能だったと理解することができる。しかし一方で、衛生設備など仕組みを示す部分図(図3)においては詳細なハッチングが再現されており、一概に技術的要因がすべてではないと言える。そこで、特徴的な3つの表現差異について引き続き詳細に検討することにより図版翻訳の姿勢の抽出を試みた。

(1) 平面図における断面部分の「影」 底本になく本書に追加された表現として、平面図における壁表現がある(図4)。

技術的には再現可能だがハッチングはされず、代わりに片側を太線によって表現することで厚みの表現をしていると思われる。壁をmassとして描かない、日本の建築図面表現との親和性を考えた表現ともとれる。

#### (2) 窓・扉などにおける「影」

扉や窓ガラスなどの建て具を見ると、細やかなハッチングをのぞき、目地やわりつけをを残しているものが多く見受けられ、部材の輪郭を明確に表現することを優先したとみることができる。また全てではないが(1)同様太線による影の強調が行われている事例があり、部材の重なりやパーツの凹凸が読み取れる表現となっている。

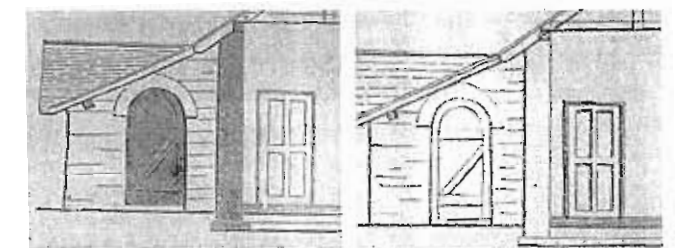


図5 部材の前後関係を強調する「影」(52図 左がCottage Building、右がひながた)

#### 煙突の陰影

本書に描かれた煙突は全部で15本あるが、それらを見ると右図のように底本にはない陰影が加えられている事例が見られる。これについて15本を調査すると、煙突に限っては陰影の表現を一概に削除

図6 煙突の表現の一例

する姿勢は見られず、むしろ他では要素を削り落としていくのに対して陰影を加えるという操作が積極的に行われていた傾向が見られた。その要因としては、煙突という馴染みのない存在にたいして、その形状に誤解を生まないように配慮であると考えられる。実際、村田は本書のなかでChimneyを「煙筒」と訳している。以上のような事例の検討から、次のように傾向を抽出することができた。

- (1) 技術再現に関わる詳細な部分図は極力正確に再現する
- (2) 全体図では構成部材の輪郭、形状や前後関係を表現する陰影(記号的に)、素材表現。(ハッチング、建物がつくる陰影)の順番に表現を選択する

という方針のもとに、副次的なものとして(2-1)平面図・断面図の場合は壁の断面を示すハッチングを省き、代わりに太線による影で厚みのある壁を表現する(2-2)日本に馴染みのない形状の要素(扉、窓、煙突、外壁の張り石装飾など)に関しては特に、陰影や影によってその形状を表現するなどのルールが考えられる。

#### 5. 考察『西洋家作雛形』の建築表現史的評価

5-1. 近世から明治における建築メディアの流れ 考察として、『西洋家作雛形』を建築表現のメディアとして評価するため、近世から明治中期にかけての建築メディアを大きく3つの段階にわけて概観した。

- ① 日本で成熟した表現方法によって日本建築を描く(輪郭線による把握) 木割書、規矩術書、雛形書のような表現は、再生産のために建築を記号や数字に置き換えて標準化し、抽象的な方法で表現される技術基盤と細部のデザイン・パターンによる建築理解の素地をつくった。記号化された表現は、その文脈の理解を前提書き手と読み手(大工)の間に基礎的知識と立体的空間把握能力が共有されていることを前提としている。
- ② 日本での表現方法によって西洋(風)建築を描く

①のように全く前提となる観念が共有されていないなかでの表現。綿絵(大衆的、再現可能ではない)、渡り職人によるスケッチ(表象的理解)、規矩術の洋式展開(既存の文脈による適応、再現可能)など様々な対応が見られる

③洋式の記号化による西洋建築の表現 明治も20年をすぎたころになると、西洋式の教育をうけた日本人建築家たちの活動が活発となる。また印刷技術も銅版が一般的となることで、西洋と全く同じ表現が再現でき、再び暗黙の了解を前提とした記号によって建築を表現することが可能となる。

#### 5-2 『西洋家作雛形』の建築表現史的評価

前節でみたような建築メディアの段階に『西洋家作雛形』を位置付けると、これは②の様々な対処のいちパターンであるといえるだろう。しかしそのメディアとしての性格は広くアマチュアにも向け、わかりやすい表現をこころがけていながら、その描写は再現可能なレベルまで詳しく、専門性が担保されている。本書は、その建築の前提概念、知識、方法を持たない人物へむけてわかりやすかつ正確に、専門的表現をかみくだく、建築ジャーナリズムの試みの端緒であったと言える

#### 結論

『西洋家作雛形』を書誌学的に把握し、その唯物的側面から本書の書物としての性格と建築表現を検討することで、本書の翻訳方針がテキストのみならず図版の翻訳にまで行き渡っていたことが確認できた。そしてそれは、西洋建築とはなんたるかを知らない建築のアマチュアにも理解可能なように、既存の表現文脈によって専門性をかみくだく、建築ジャーナリズムの端緒として見ることができると指摘できた。